

現代大学生の「一人でいられる能力」 (Capacity to Be Alone) の特性

今泉美華子・西谷 健次

1. はじめに

近年の青年の友人関係には、必要以上に親密な友人関係を築かないが、仲間はずれにされることを恐れるがゆえに「群れ傾向」が見られる。つまり、現代の青年は、自分の周りに誰もいない状況よりも、親しくない友人であっても周りに誰かがいる状況を好むと言える。このような対人関係における他者との距離感をとることの難しさは、社会的引きこもりの一因として、現代的な問題の一つと位置付けられている。

こうした現代青年の抱える問題は、逆説的ではあるが、「一人でいられる能力」と関係が深いと考えられる。というのも、「一人でいられる能力」とは、自分の周りに誰もいない状況を避けるためだけに、親しくもない友人と無理して接するくらいならば、むしろ、本当に親しい友人がいなければ、自分の周りに誰もいなくても構わないとする、強い生き方と関連があるからである。

Winnicott, D.W. (1958) は、精神分析学の観点から、「一人でいられる能力」の確立には、誰かと一緒にいてしかも一人での体験が必要であるとした。例えば幼児期に、母親と四六時中一緒にいる子どもが母親に対して「いつでも見守ってくれている」という信頼を持つようになると、母親と同じ部屋にいながら一人遊びを楽しめるようになる。そして、実際に母親がそばにいななくても不安を感じずにいられるようになるのである。「一人でいられる能力」は個人の中の心的現実の良い対象がいるかどうかによって決まり、心的現実または現実に存在する誰かといながらにして、一人での状態を指して「一人でいる」と表現している。つまり、「一人でいられる能力」は自分と相手を個として受け入れ、なおかつ心的なつながりを持っていられるということである。他者とうまく距離をとることが難しくなっている現代の青年の対人関係において、注目すべき能力であると言える。

野本 (1999) はWinnicott, D.W. (1958) の概念を参照し、文章完成法による予備調査をもとにCBA (Capacity to Be Alone) 尺度を作成し、その後、野本 (2000) は、CBA 尺度の精緻化を行った。

野本 (2000) は、専門学校生103名を対象に調査を実施し、その結果、CBAが4因子より構成されており、第1因子を「孤独不安耐性」因子、第2因子を「くつろぎと孤独欲求」

因子、第3因子を「つながりの感覚」因子、第4因子を「個別性に対する気づき」因子と名付けた（表1）。

表1. CBA尺度について因子分析を行った結果（野本,2000）

第1因子	「孤独不安耐性」因子	一人でいることに不安を感じないでいられる
第2因子	「くつろぎと孤独欲求」因子	一人の時間をくつろぐことができ、自ら孤独を求めて一人の問題を考える
第3因子	「つながりの感覚」因子	他者との心的つながりをもつ
第4因子	「個別性に対する気づき」因子	人間の個性を意識し、自分なりの生き方を模索している

また、4つの下位因子の相関係数を算出した結果、「孤独不安耐性」因子と「くつろぎ・孤独欲求」因子の間に弱い正の相関が見られ、「個別性に対する気づき」因子と「くつろぎ・孤独欲求」因子の間にも弱い正の相関が見られた。「つながりの感覚」因子はどの因子とも相関を持たず、独立した性質のものであることが分かった（表2）。

表2. 下位因子同士の相関係数（野本,2000）

	孤独不安耐性	くつろぎ・孤独欲求	つながりの感覚
くつろぎ・孤独欲求	0.28 *		
つながりの感覚	-0.03	-0.10	
個別性に対する気づき	0.12	0.33 *	0.12

さらに野本（2000）は、下位因子得点ごとに被験者間の比較を行っている。性差については、「つながりの感覚」因子において有意に女性の方が高く、「孤独不安耐性」因子においては有意に男性の方が高かった（表3）。配偶者（恋人）の有無による差については、「くつろぎ・孤独欲求」因子においてのみ、配偶者（恋人）がいない者の得点がある者の得点よりも高かった（表4）。

表3. 性差（野本,2000）

	男性	女性	t値	p
孤独不安耐性	43.25	38.69	2.08	0.04 *
くつろぎ・孤独欲求	45.50	44.89	0.34	0.74
つながりの感覚	39.52	43.33	-2.43	0.02 *
個別性に対する気づき	28.52	27.05	1.79	0.08

*印は $p < .05$

表4. 配偶者（恋人）の有無の差（野本,2000）

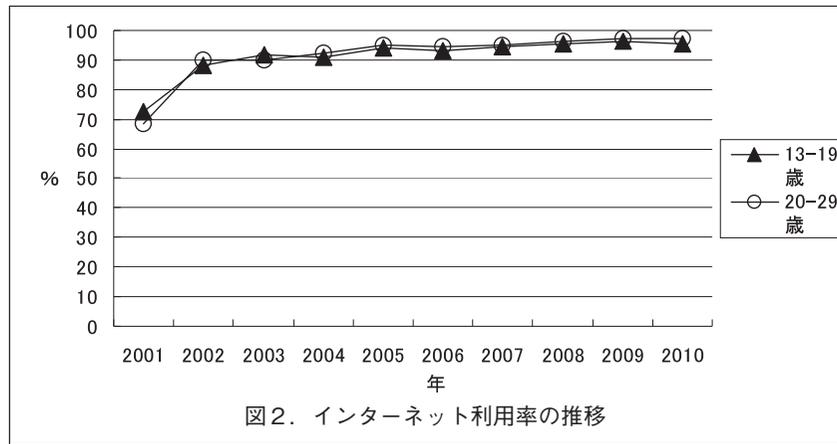
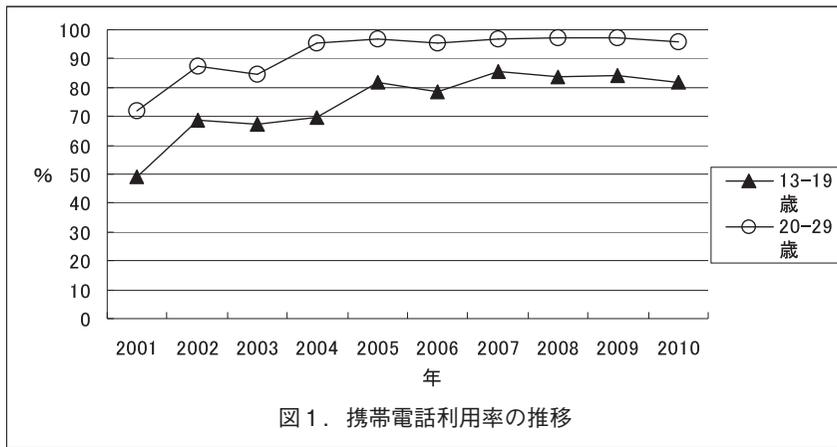
	配偶者など有	配偶者など無	t値	p
孤独不安耐性	38.66	41.03	-1.03	0.31
くつろぎ・孤独欲求	41.03	47.15	-3.34	0.00 **
つながりの感覚	43.66	40.90	1.60	0.11
個別性に対する気づき	26.80	28.27	-1.71	0.09

**印は $p < .01$

野本（2000）は、因子軸の回転を直交解（バリマックス回転）で求めているのに因子間

相関を求めている、調査対象者のほとんどが一人暮らしであり調査対象者の分布に偏りがあるなど、いくつかの問題を指摘することができるが、Winnicottに基づいて「一人でいられる能力」の尺度化を試みた点は非常に有益な知見が得られたと言える。

ところで、野本が研究を行った90年代後半と比べて、「一人でいられる能力」は変わらずに大きな問題と位置づけられるが、その後の10年では、コミュニケーション携帯に著しい変化が認められる。すなわち、携帯電話・スマートフォンやインターネットの普及である。野本(2000)の調査時期以降、本調査までの10年間で携帯電話やインターネットの普及が著しく、利用率も上がっている(図1、図2)。このことからコミュニケーション形態の変化も考えられ、それが「一人でいられる能力」に影響している可能性も考えられる。



そこで、本研究では、野本(2000)の研究の不備な点を是正しつつ、改めて野本(2000)の作成したCBA尺度を用いて現代の大学生の「一人でいられる能力」を測定し、野本(2000)の測定結果との比較を行い、変化が見られるのかを検討していきたい。

2. 調査

(1) 目的

CBA尺度を用いて現在の大学生の「一人でいられる能力」を測定し、野本（2000）の測定結果との比較を行う。因子分析では斜交回転により因子間相関に注目する。先行研究では、因子同士の関連性と各因子得点の性差・配偶者（恋人）の有無による差・居住形態差といった比較を行っていたが、さらに本研究では学部差を調査に加えて比較を行う。

(2) 方法

野本（2000）のCBA尺度から質問紙を作成し、大学生を対象に質問紙調査を実施した。

【調査対象者】

S 大学および S 大学女子短期大学の学生309名。詳細は表5に記載。

表5. 被験者の性別と学部

学部	男性	女性	合計
経営・総政	76	16	92
人文	40	53	93
短大	-	124	124
合計	116	193	309

【実施年月】

2010年10月

【質問項目】

野本（2000）と同様のものを利用した。46項目。各因子に対応して10項目程度の質問。詳細は表7に記載。

【質問紙の構成】

A 3、両面印刷。

1 ページ目にタイトル、教示文「次ページから質問が始まります。「全く当てはまらない」～「よく当てはまる」の5段階のうち、自分の気持ちに最も近いものに○を付けてください。」

CBA尺度（5段階評価）

学部・年齢・性別・居住形態・配偶者（恋人）の有無に関するフェイス・シート

【手続き】

授業開始から10分間、集団で一斉に実施した。CBA尺度の回答については、「よく当てはまる」、「やや当てはまる」、「どちらともいえない」、「やや当てはまらない」、「全く当てはまらない」の5段階で回答を求めた。回答してもらった質問紙はその場で回収された。

(3) 結果と考察

【結果の得点化】

データの分析にあたり、「よく当てはまる」を5点、「やや当てはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや当てはまらない」を2点、「まったく当てはまらない」を1点として分析に用いた。また、逆転項目では、各項目の回答について5段階評価を逆に得点化し、「よく当てはまる」を1点、「やや当てはまる」を2点、「どちらともいえない」を3点、「やや当てはまらない」を4点、「まったく当てはまらない」を5点として分析に用いた。

【因子分析】

回答に極端に偏りのあった7名を分析から除外し、302名を分析の対象とした(表6)。

表6. 被験者の性別と学部

学部	男性	女性	合計
経営・総政	70	16	86
人文	39	53	92
短大	-	124	124
合計	109	193	302

次に各項目について、天井効果、床効果が出ている項目がないか確認するために平均値と標準偏差を算出した(表7)。平均値+標準偏差が、尺度値の上下限を超える項目を天井効果・床効果が出ているとみなし、天井効果が3項目(「項目番号41:友人や家族、配偶者(恋人)と意見が違う時があるのは自然なことだと思う」、「43:人の心には、共有できる部分とできない部分があると思う」、「46:誰もが、自分だけの秘密の世界を持っていると思う」)見つかったため、これらの項目を分析から除外した。

天井効果の見られた項目を除外した43項目について、因子分析を行った。野本(2000)では、主成分法、バリマックス回転による因子分析を行っていたが、因子間の相関を調べにあたり適切ではないため、本研究では主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の落差が大きく、内容的にも解釈が可能な3因子解が妥当であると判断した。回転後の因子負荷量を表8に示す。

表7. CBA尺度の平均値と標準偏差

項目番号	項目内容	平均値	標準偏差
41	友人や家族、配偶者(恋人)と意見が違う時があるのは、自然なことだと思う。	4.31	0.95
43	人の心には、共有できる部分とできない部分があると思う。	4.16	0.95
46	誰もが、自分だけの秘密の世界を持っていると思う。	4.14	1.06
39	自分に起こった出来事は、楽しいことだけでなく苦しいことも、しっかりと受け止めたい。	3.93	1.00
26	今はそばにいないが、自分の心の支えになっている人がいる。	3.79	1.18
28	自分が一人だと思うと、仕事や勉強に集中できなくなる。(*)	3.77	1.15
35	自分には、人の力を借りずに解決するべき自分自身の課題があると思う。	3.71	1.04
7	自分には本当に心の通じ合う人がほとんどいない。(*)	3.70	1.16
2	私には、ここ、という自分の居場所がある。	3.70	1.08
42	誰にも邪魔されずに考えごとをしたいと思うことがよくある。	3.69	1.14
17	人と過ごす時間と同じくらい、一人で過ごす時間も重要だと思う。	3.68	1.14
22	自分らしい生き方ができるように努力している。	3.64	1.03
12	私は周りから孤立していると思う。(*)	3.58	1.07
16	私は、周りの人とごく親しい関係を持っているわけではない。(*)	3.57	1.08
37	時々、人間関係から距離を置いて一人になりたいと思う。	3.56	1.27
33	一人で淋しくなっても、だいたい我慢できる。	3.53	1.15
45	本当に辛い時には、一人でいる時間が必要だと思う。	3.52	1.14
19	たとえ今は一人でも、本当の意味では一人ぼっちではないと思う。	3.51	1.11
3	一人でいる時間は、よりよい自分になるために重要だと思う。	3.50	1.13
24	私は、自分のやりたいことに熱中するために一人になる。	3.47	1.11
40	私は地に足をつけて生きていると思う。	3.46	1.07
25	一人でいると、ずっと一人ぼっちかもしれないと不安に思う。(*)	3.46	1.22
11	自分が一人ぼっちだと思うと、落ち着かない。(*)	3.45	1.22
29	今まで生きてきた人生や将来の希望が、心の支えになっていると思う。	3.44	1.10
8	自立して一人でも生きていける人になろうと努力している。	3.40	1.09
20	一人でいると、とてもリラックスした気分になる。	3.40	1.11
34	私が本当に困った時には、誰か(何か)が助けてくれるという確信がある。	3.34	1.14
27	一人でいると、ありのままの自分になれる。	3.27	1.18
5	一人でいると、ストレスから解放される。	3.23	1.18
1	一人ぼっちに耐えられない時がある。(*)	3.22	1.33
38	私は、何か見えない大きな力に支えられていると思う。	3.17	1.20
32	一人でいる時の自分は、自分らしいと思う。	3.14	1.14
6	一人でいると、気弱な気分になる。(*)	3.14	1.20
10	私は何かといつもつながっていると感じている。	3.14	1.06
13	一人でいると、疲れた心が癒される。	3.13	1.12
23	一人でいても、誰かと心の中でつながっている感じがする。	3.12	1.11
36	一人でいる時、極端に落ち込むことはない。	3.06	1.27
31	一人で淋しいと思った時、何かをしてまぎらわせずにはいられない。(*)	3.04	1.20
44	一人でいる時の自分が好きだ。	3.04	1.08
15	一人でいると、物事をどんどん悪い方向に考えてしまう。(*)	3.03	1.25
18	自分の気持ちが誰にも分かってもらえなかったらどうしようと思う。(*)	3.03	1.18
30	自分の心の底には大きな潜在能力があると感じている。	2.87	1.15
21	わけもなく淋しくてやりきれない時がある。(*)	2.84	1.29
4	一人でいる時、誰かにそばにいてほしいとよく思う。(*)	2.84	1.19
14	自分の感情や考えを人に分かってほしくてたまらないことがよくある。(*)	2.75	1.16
9	辛いことや悲しいことがあった時には、よく誰かに頼りたいと思う。(*)	2.51	1.22

※(*)は逆転項目

※除外した項目に網掛け

表8. CBA尺度の因子負荷量 (プロマックス回転後)

項目番号	項目内容	因子			共通性
		1	2	3	
11	自分が一人ぼっちだと思うと、落ち着かない。(*)	0.74	0.12	0.01	0.57
15	一人でいると、物事をどんどん悪い方向に考えてしまう。(*)	0.71	-0.01	0.07	0.50
21	わけもなく淋しくてやりきれない時がある。(*)	0.70	-0.07	-0.07	0.51
1	一人ぼっちに耐えられない時がある。(*)	0.70	0.09	-0.13	0.53
25	一人でいると、ずっと一人ぼっちかもしれないと不安に思う。(*)	0.69	-0.02	0.09	0.48
6	一人でいると、気弱な気分になる。(*)	0.69	0.02	-0.05	0.48
18	自分の気持ちが誰にも分かってもらえなかったらどうしようと思う。(*)	0.63	-0.11	0.02	0.40
31	一人で淋しいと思った時、何かをしてまぎらわせずにはいられない。(*)	0.63	0.05	-0.19	0.44
4	一人でいる時、誰かにそばにいてほしいと思う。(*)	0.58	0.13	-0.26	0.43
9	辛いことや悲しいことがあった時には、よく誰かに頼りたいと思う。(*)	0.53	0.11	-0.37	0.44
14	自分の感情や考えを人に分かってほしくてたまらないことがよくある。(*)	0.52	-0.10	-0.25	0.38
36	一人でいる時、極端に落ち込むことはない。	0.52	0.20	0.13	0.34
28	自分が一人だと思うと、仕事や勉強に集中できなくなる。(*)	0.48	-0.02	0.01	0.23
37	時々、人間関係から距離を置いて一人になりたいと思う。	-0.08	0.70	-0.03	0.48
20	一人でいると、とてもリラックスした気分になる。	0.20	0.64	0.18	0.56
13	一人でいると、疲れた心が癒される。	0.04	0.64	0.04	0.43
5	一人でいると、ストレスから解放される。	0.04	0.62	0.02	0.40
44	一人でいる時の自分が好きだ。	0.14	0.61	-0.02	0.40
27	一人でいると、ありのままの自分になれる。	0.05	0.61	0.14	0.45
17	人と過ごす時間と同じくらい、一人で過ごす時間も重要だと思う。	0.04	0.59	0.10	0.40
32	一人でいる時の自分は、自分らしいと思う。	-0.03	0.58	0.02	0.35
45	本当に辛い時には、一人でいる時間が必要だと思う。	0.09	0.55	0.00	0.32
42	誰にも邪魔されずに考えごとをしたいと思うことがよくある。	-0.12	0.53	0.06	0.31
24	私は、自分のやりたいことに熱中するために一人になる。	0.07	0.53	0.29	0.46
7	自分には本当に心の通じ合う人がほとんどいない。(*)	0.28	-0.50	0.40	0.34
3	一人でいる時間は、よりよい自分になるために重要だと思う。	-0.04	0.48	0.27	0.39
12	私は周りから孤立していると思う。(*)	0.38	-0.47	0.47	0.41
16	私は、周りの人とごく親しい関係を持っているわけではない。(*)	0.33	-0.40	0.39	0.29
33	一人で淋しくなっても、だいたい我慢できる。	0.37	0.40	0.13	0.36
35	自分には、人の力を借りずに解決するべき自分自身の課題があると思う。	-0.04	0.32	0.32	0.27
34	私が本当に困った時には、誰か(何か)が助けてくれるという確信がある。	-0.04	-0.05	0.63	0.39
23	一人でいても、誰かと心の中でつながっている感じがする。	-0.17	-0.04	0.61	0.41
10	私は何かといつもつながっていると感じている。	-0.23	-0.14	0.57	0.37
26	今はそばにいないが、自分の心の支えになっている人がいる。	-0.12	0.02	0.56	0.35
38	私は、何か見えない大きな力に支えられていると思う。	-0.09	0.03	0.56	0.34
2	私には、ここ、という自分の居場所がある。	0.04	0.14	0.55	0.37
29	今まで生きてきた人生や将来の希望が、心の支えになっていると思う。	-0.03	0.22	0.55	0.43
22	自分らしい生き方ができるように努力している。	-0.01	0.23	0.52	0.41
40	私は地に足をつけて生きていると思う。	0.10	-0.02	0.52	0.27
39	自分に起こった出来事は、楽しいことだけでなく苦しいことも、しっかりと受け止めたい。	0.08	0.21	0.51	0.38
19	たとえ今は一人でも、本当の意味では一人ぼっちではないと思う。	-0.05	0.21	0.42	0.28
8	自立して一人でも生きていける人になろうと努力している。	-0.03	0.13	0.41	0.22
30	自分の心の底には大きな潜在能力があると感じている。	-0.07	0.09	0.38	0.18
	固有値	8.27	6.65	3.58	
	累積寄与率(%)	19.22	34.69	43.01	

※小数第3位を四捨五入

※(*)は逆転項目

※負荷量の絶対値が、400以上のものに網掛け

※累積寄与率は回転前のものを記載

【因子分析結果】

野本(2000)では4因子解であったが、今回の分析では、4因子解だとまとまりが悪くなるため3因子解を採用した。質問項目を比較してみると、第1因子の「孤独不安耐性」と第2因子の「くつろぎと孤独欲求」、第3因子の「つながりの感覚」は野本(2000)とほぼ同じであった。第4因子の「個別性に対する気づき」が抽出されなかった原因としてこの因子の特殊性が考えられる。天井効果の見られた3つの項目の内、2つ(「項目番号41:友人や家族、配偶者(恋人)と意見が違う時があるのは自然なことだと思

う)、「43：人の心には、共有できる部分とできない部分があると思う)が第4因子の項目であったこともあり、この因子の項目が全体的に回答しづらい、または普段、当たり前すぎて意識しにくい内容(例えば、「30：自分の心の底には大きな潜在能力があると信じている)や「35：自分には、人の力を借りずに解決すべき自分自身の課題があると思う)だったのかもしれない。しかし「個別性に対する気づき」というのは、「一人でいられる能力」において重要な要素であるといえる。極度の依存心など、病的なケースでこの第4因子「個別性に対する気づき」は必要となってくるのではないだろうか。今回の分析では除外したが、個別にこの因子を利用できる可能性があると思われる。

【下位因子同士の関連性】

下位因子同士の相関を見てみると、「くつろぎと孤独欲求」因子と「つながりの感覚」因子の間に弱い正の相関が見られた(表9)。

表9. 下位因子同士の相関

	孤独不安耐性	くつろぎ・孤独欲求
くつろぎ・孤独欲求	0.05	
つながりの感覚	-0.07	0.31 *

これは野本(2000)では見られなかった結果であり、また、野本(2000)で見られた「孤独不安耐性」因子と「くつろぎと孤独欲求」因子の間の弱い正の相関は見られなかった。こういった結果となった要因として、前述したようにここ10年での通信手段の利用率の上昇が考えられる(図1、図2)。

10代、20代の携帯電話とインターネットの利用率は野本(2000)の調査時期以降、年々増加し2009年には20代の携帯電話利用率は97.3%、インターネット利用率は97.2%に上がっている。携帯電話の普及とともにメールや電話が手軽になり、また、インターネット上で他人と関わる機会も増えたと思われる。これらのことから、現実一人でも他人とつながる手段が増えたため、孤独というものを感じにくくなったのではないかと考えられる。

【被験者間の比較】

以下の分析では、被験者ごとに各因子の因子スコアを求め、それを分析した。

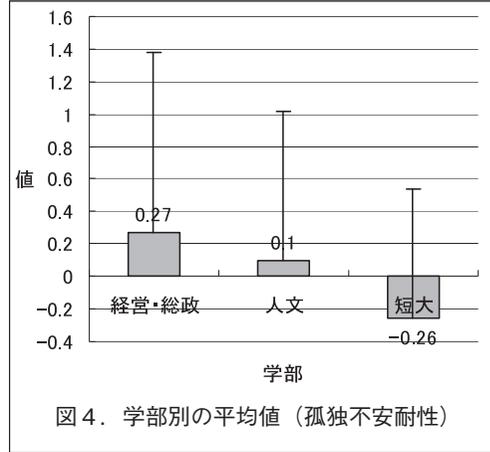
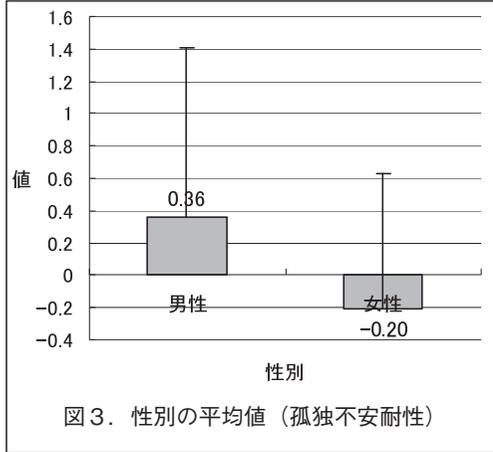
まず性差についてであるが、本研究では学部差についても調査を行っているため、その影響を考慮して性別と学部で2要因の分散分析を行うことにした。

「孤独不安耐性」因子について比較を行った。結果を表10、図3と図4に示す。

表10. 平均値と標準偏差 (孤独不安耐性)

性別				
学部	男性	女性	合計	N
経営・総政	0.31(1.34)	0.10(1.02)	0.27(1.11)	84
人文	0.45(0.89)	-0.16(0.85)	0.10(0.92)	91
短大	—	-0.26(0.80)	-0.26(0.80)	122
合計	0.36(1.05)	-0.20(0.83)	0.00(0.96)	297

※()内は標準偏差



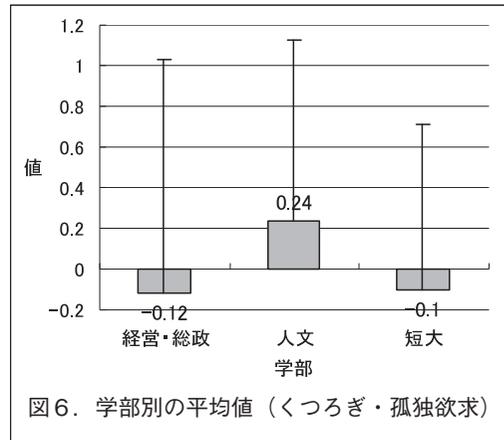
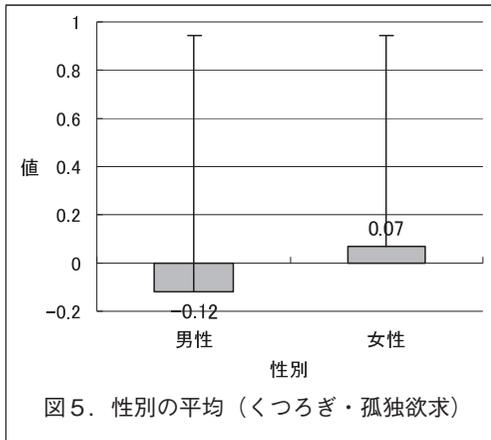
学部と性別に交互作用は見られなかった。主効果を見ると、学部では有意でなく、性別では主効果が有意であり ($F_{(1,292)}=6.30, p<.01$)、男性>女性となった。この性差については、野本 (2000) と同じ結果である。男性の方が、社会の中で一人であることを淋しいと思うことや心細く思うことを否定的に捉えている傾向があり、また社会からも男性は一人で自立することを望まれているのではないかと考えられる。反対に女性は、他人と一緒に行動することを好む傾向があるのではないだろうか。

「くつろぎと孤独欲求」因子について比較を行った。結果を表11と図5、図6に示す。

表11. 平均値と標準偏差 (くつろぎ・孤独欲求)

性別				
学部	男性	女性	合計	N
経営・総政	-0.25(1.14)	0.44(1.02)	-0.12(1.15)	84
人文	0.11(0.86)	0.34(0.90)	0.24(0.89)	91
短大	—	-0.10(0.81)	-0.10(0.81)	122
合計	-0.12(1.06)	0.07(0.88)	0.00(0.95)	297

※()内は標準偏差



学部と性別に交互作用は見られなかった。交互作用が有意でなかったため、主効果を見る。まず、学部について主効果が有意であった ($F_{(2,292)}=6.92, p<.01$)。多重比較の結果、人文>経営・総政=短大となった。つまり、「くつろぎと孤独欲求」因子については学部差があり、人文が高いと言える。一人の時間を好み、楽しめるとというのが人文の特色であると考えられる。

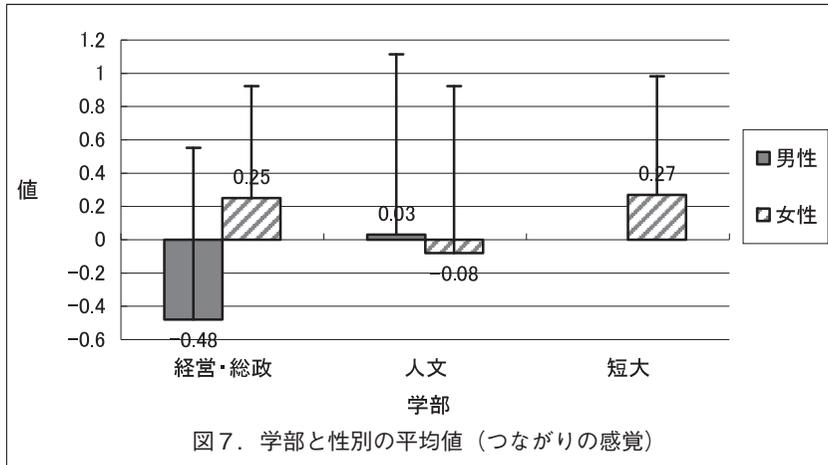
性別の主効果も有意であった ($F_{(1,292)}=7.78, p<.01$) が、男性<女性となっているのに短大の得点が経営・総政と変わらず低い。野本 (2000) では「くつろぎと孤独欲求」因子では性差はないという結果であったが、先述した点を考えると比較をするには少々疑問の残るものとなった。

「つながりの感覚」因子について比較を行った。結果を表12と図7に示す。

表12. 平均値と標準偏差 (つながりの感覚)

学部	性別		合計	N
	男性	女性		
経営・総政	-0.48(1.03)	0.25(0.67)	-0.35(1.01)	84
人文	0.03(1.08)	-0.08(1.00)	-0.04(1.03)	91
短大	—	0.27(0.71)	0.27(0.71)	122
合計	-0.30(1.07)	0.17(0.81)	0.00(0.94)	297

※()内は標準偏差



学部と性別で交互作用が有意であった ($F_{(1,292)}=6.97, p<.01$) ので、単純主効果の検定を行った。

経営・総政において、性別の単純主効果が有意であり ($F_{(1,292)}=8.11, p<.01$)、男性において学部の単純主効果が有意であった ($F_{(1,292)}=7.92, p<.01$)。人文の男性の方が、経営・総政の男性よりも得点が高いということになる。さらに先述した分散分析の結果と併せて全体を見てみると、経営・総政では男性<女性となり、人文では性差なし、女性の中に学部差は見られなかった。つまり、経営・総政の女性=人文=短大となる。経営・総政の男性のみが得点が低い結果になったと言えるだろう。女性は他人とのつながりを重視する、「つながりの感覚」因子が高くなる傾向がある。人文の男性にそういった女性に近い傾向を持つ特色があるとすれば、「つながりの感覚」因子において男性<女性であるという野本 (2000) の結果に沿うものであると言えるのではないだろうか。

配偶者 (恋人) の有無による差を調べた。ほぼ全員の被験者が20歳前後であるため、配偶者 (恋人) の有無は恋人の有無と考えて良いだろう。「孤独不安耐性」因子では有意差は見られなかった ($F_{(1,291)}=0.05, n.s.$)。「くつろぎと孤独欲求」因子においても有意差は見られなかった ($F_{(1,291)}=3.13, n.s.$)。「つながりの感覚」因子について、有意差が見られ ($F_{(1,291)}=4.98, p<.05$)、恋人有>恋人無となった。

野本 (2000) では見られなかった、「つながりの感覚」因子に差が見られ、野本 (2000) で見られた「くつろぎと孤独欲求」因子に差が見られない結果となった。こうなった要因として、因子の相関でも述べた、通信手段の普及が挙げられる。野本 (2000) では、恋人のいない者の方が「くつろぎと孤独欲求」因子が高いという結果となっており、恋愛対象のいる者は一人になりたいという気持ちを意識しにくい傾向がある。恋人と一緒にいたいという気持ちが強いと言える。それに対し今回の調査では、恋人のいる者の方が「つながりの感覚」因子が高いという結果となった。恋人と離れていても、メールや電話などで

ぐに連絡が取れることから、孤独というものを意識しにくくなっているのではないだろうか。

居住形態について比較を行ったところ、「孤独不安耐性」因子について有意差は見られなかった ($F_{(1,293)}=0.03, n.s.$)。「くつろぎと孤独欲求」因子についても有意差は見られなかった ($F_{(1,293)}=0.65, n.s.$)。「つながりの感覚」因子についても有意差は見られなかった ($F_{(1,293)}=1.13, n.s.$)。3因子とも、居住形態による差は見られなかった。現在の同居家族の有無は、「一人でいられる能力」にそれほど関係しないということが分かった。

3. 総合考察

本研究は野本（2000）との比較を目的として行われた。因子間相関、恋人の有無による差について、野本（2000）との違いが見られた。因子間相関については、野本（2000）では「孤独不安耐性」因子と「くつろぎと孤独欲求」因子の間に弱い正の相関が見られたが、今回の結果では「くつろぎと孤独欲求」因子と「つながりの感覚」因子の間に弱い正の相関が見られた。恋人の有無による差については、野本（2000）では「くつろぎと孤独欲求」因子において恋人有<恋人無という結果であったが、今回の結果では「つながりの感覚」因子において恋人有>恋人無となった。

2つの違いに共通しているのは、携帯電話やインターネットといった通信手段の進歩に伴う、利用率の上昇である。時代の変化によって、対人関係の形や他人に対する意識も変化していることが分かった。現代では、現実にも一人でいても孤独を意識しにくく、常に外の世界とつながっているような状態なのではないだろうか。しかし、このつながっている状態というのは、実際に顔をあわせる代わりにメールなどの手段を用いているもので、「一人でいられる能力」でいう他者との心的なつながりとは別物であるように思える。他人との連絡や世の中の情報を手に入れることが簡単になるにつれ、「一人でいられる能力」でいう、「一人でいる」状態になることは難しくなっているのかもしれない。

性差についてであるが、本研究では学部差と併せて分析を行った。想定していたよりも学部の特色が表れており、性差のみの比較をするには不明瞭になってしまった部分もあったが、「孤独不安耐性」因子は男性が高く、「つながりの感覚」因子は女性が高いという傾向が見られた。基本的には野本（2000）と同じ傾向が見られたとあって良いのではないだろうか。性差には、男性は社会で自立し、女性は他人とのつながりを重視するといった、社会に望まれる男性、女性のイメージというものが影響を与えているように推測される。

各学部の特色については、「くつろぎと孤独欲求」因子について人文が他の学部に比べて高く、人文の学生は一人の時間を好み、楽しめる傾向があることが分かった。「つながりの感覚」因子においては、経営・総政の男性と人文の男性に差があることが分かった。

学部、つまり学ぶ領域を選ぶ際に、個人の性質や傾向が影響すると考えられる。

また、野本(2000)の第4因子「個別性に対する気づき」因子を今回の分析では除外した。今回の調査では因子としてまとまりが悪くなってしまったが、この「個別性に対する気づき」因子は「一人でいられる能力」にとって重要な要素である。今後さらに調べていく必要があると思われる。

「一人でいられる能力」の因子構造自体に大きな変化が認められなかったものの、因子間相関、恋人の有無による差において相違が認められた。すなわち、「一人でいられる能力」そのものの性質は変化していないが、その傾向性においては変化が生じていると推測される。今回の調査は、あくまでも野本(2000)との比較を中心としたために、携帯電話・スマートフォン、インターネットの利用状況などについては調べていない。しかし、通信技術の進歩と若者の対人関係のあり方にはなんらかの関係があると考えられる。このことについて、さらに調べる必要がある。

引用文献

- 野本 美奈子 2000 Capacity to Be Aloneの逆説性と多重性に関する研究－「一人でいる能力」精緻化の試み－大阪大学教育学年報, 第5号, 125-137.
- 岡田 努 2007 現代青年の友人関係と自己象・親友象についての発達の研究 金沢大学文学部論集 行動・哲学篇, 第27号, 17-34.
- 総務省 通信利用動向調査 (平成13年～22年調査)
- Winnicott,D.W. 1958 “The Capacity to Be Alone”, 416-420 牛島定信訳 1977 『情緒発達の精神分析論』 岩崎学術出版社, 211-31.